

## 森林ふれあい推進事業を実施

天空の爽回廊(セラピーロード)と天然記念物「大引割」を訪ねて

〈指導普及課〉

第二回森林ふれあい推進事業を十九名の参加のもと六月二十八日に開催しました。

目的地の一つは、カルスト

台地とそこに放牧されている牛、梶原町をあげて地球温暖化防止対策に取り組むために設置された、風力発電の風車二基が織り成す叙情的な風景が広がる姫鶴平。現地に到着すると、それまで一面に立ち込めていた霧が晴れ、三六〇度の大パノラマに感動してい



セラピーロードの効用を体験した参加者

ました。

その後、セラピーロードの起点にある天狗荘に移動し、昼食と森林教室を実施しました。

森林教室では、セラピーロードの効用、周辺林分に生育する植生、ブナ二次林の話等について高知大学講師の黒岩和男先生がわかりやすく説明しました。

午後からは、全員で足腰などのストレッチを行った後、天然記念物大引割(有史以来の地殻変動、又は地震により生じた幅八m、深さ三〇m、長さ八〇mの岩石の割れ目)を、目指して出発しました。途中、竹、ススキ、ミヤコザサなどの見分け方やキリンソウ、タチツボスミレ、ホウチクソウなどの名前の由来、エゴノキや、ヒメシヤラなどを観察しながら、一時間五〇分かけて、大引割に到着しました。

この日は、ちょうど梅雨の最中であつたことから、散策途中から大粒の雨が降ってきましたが、幸い、セラピーロードは広葉樹の葉で被われて

おり、雨を受止めてくれ、合羽も着ることなく無事イベントを終了することができました。樹木が雨を受け止め、幹を伝って徐々に地上へと流し、洪水を防止しているという役割を学ぶなど、この雨も森林教室の教材となってくれました。

森林ふれあい推進事業のイベントに初めて参加された方からは、「良いイベントに参加させてもらいました。歩きやすいし、心が癒されました。」などの感想がありました。

## 技術開発の普及の

### 取組を紹介

「公開講座を開催」

〈森林技術センター〉

七月二十三日、「ヤナセスギを次代へ」森林技術センターの取組」と題して当センター主催による公開講座を馬路村魚梁瀬で開催しました。

この公開講座は、技術開発を一般の方々にも理解してもらうことなどを目的に実施したもので、林立するヤナセスギの雄大さと美しさを肌で感



千本山試験地内での説明の様子

じてもらい、さらに後世にこのヤナセスギ林を引き継ぐために当センターが実施している天然更新技術の確立の重要性を理解してもらう初めての試みに、一般公募の小学生とその保護者十一名が参加しました。

当センターの和田山天然更新試験地は、美しい森林づくりのモデル的取組にも選定されていますが、日帰りでは日程的に厳しいこともあり、比較的近くにありヤナセスギの天然更新を研究している森林総合研究所四国支所の千本山試験地で天然更新の取組を紹介しました。

そこでヤナセスギの特徴、

後世に伝えることの重要性、天然更新の難しさを学んだ後、それぞれでヤナセスギの稚樹を観察しました。子供たちは、スギの赤ちゃん(稚樹)を見つけたら、シカの糞を見て、かなり興奮気味でした。

その後、千本山登山口に移動し、魚梁瀬山の案内人と千本山登山を開始しました。

ヤナセスギの大木を前に、感嘆の声をもらす参加者もみられ、ヤナセスギの歴史を学び、千本山の醍醐味を味わいながらも、後継樹の無い現状を目の当たりにして、天然更新技術の重要性を実感したようでした。

参加者からは、「普段体験できないことを子供に体験させることができ、大変有意義な企画でした。」「ヤナセスギのことがいろいろ知れてよかったです。」「とてもよい企画だが、もっと多くの人にヤナセスギを知ってもらえるよう、PRの仕方を工夫したら良いのではないか。」等の貴重な意見をいただき、充実した公開講座を行うことができました。

帰りのバスでは、さすがに疲れたせいか、子供たちはお土産の木工品を大事そうに抱え、ぐっすりでした。



安芸署での研修会

## 低コスト作業路網 作設技術研修会の開催

〈販売課〉

四国局では、低コストな木材搬出のために壊れにくい作業路を作設する必要があることから、昨年度までは請負事業体等を対象として現地での検討会を開催してきました。

平成二十年度については、局ホームページを利用して広く関係なく研修会への参加を呼びかけたところ、徳島署・香川所ブロック、嶺北署・高知中部署ブロック、愛媛署、四万十署、安芸署の路網を活



四万十署での実演指導

用した素材生産請負事業の作業現地に四六社、総勢一二九名もの参加があり、七月二十五日から八月一日の間に各地で実施しました。

研修会では、壊れにくい作業路網作設技術の向上を図る観点から、その基本である表土ブロック積工法の実演指導や、水処理対策の重要性、立木を利用した丸太組土留工の箇所での路側崩壊が発生しているのを踏まえて適切な設置方法、等についての説明を行い、参加者の皆さんからも活発な意見が出され作設技術向上に向けた有意義な研修会となりました。



山下教授の講義の様子

## 森林環境教育の 重要性を再認識

〈森林ふれあい担当者等会議を開催〉

〈指導普及課〉

八月二十一・二十二日、森林管理署等の森林ふれあい係長等を対象に、「平成二十年度森林ふれあい担当者等会議」を開催しました。

今年度は、森林環境教育をより効果的に進めるため、平成十九年度における各署等の森林環境教育の取組を紹介し、意見交換を行うとともに、翌二十二日に行った「四国山の日賞選考委員会」の委員として来高された森林環境教育に造詣の深い京都教育大学山下

教授にアドバイスをいただくことを主眼として行いました。

はじめに、指導普及課長から、「森林環境教育の目指す方向について」として、森林環境教育が生まれた背景・目的を改めて説明し、特に、教育・環境・地域振興等の異分野との連携による取組が重要であり、現状の「待ち型」から「提案型」への転換を図っていくことが必要であることについて、共通認識を深めました。

次に、山下教授を交えた各署等の取組紹介及び意見交換を行いました。取組紹介では、十八年度までは屋内中心で小学生を対象とした森林教室を実施していたが、反応が思わしくなかったことから、十九年度は森林組合と連携し屋外で森林教室を実施したところ、子どもたちの気づきが一変したとの効果や、天候に対する対応が不十分であったとの反省点などが出されました。意見交換では、山下教授から全体を通して、①コンセプト（ねらい）を明確にして実施し、それに対して評価・分析を行い、次回に反映させること、②木工教室の実績が多いが、単に材料を組み立てるだけで

はなく、元の木はこういうものというところを見せ、森林をイメージさせること、③募集や実施後においては、各種メディアを積極的に活用し、広くPRすることのアドバイスをいただきました。

また、山下教授から、「国有林における森林環境教育の取組に期待するもの」と題した講義もいただきました。期待するもののポイントとして、①森林環境教育の重要性とあり方の普及・啓発、②学校教育における「森林」の扱いの徹底、③子どもたちの森林のポイントの実現を掲げられました。具体的には、①では、森林環境教育は、森林の中で体験により、子どもの調べる力、感性を養うものであり、先生に関心の高い子どもたちの問題に通じるものであるが、森林の重要性等についての理解（知識）が不足している先生が多いことから、先生に対する啓発、問題意識の徹底を図っていくことが必要、②では、小・中学校の学年ごとに森林についての学習の扱いが異なることから、学年に応じた具体的な森林環境教育プログラムを学校に提示していく



ことが必要、③では、子どもについても先生同様に、森林に対する知識は不正確であることから、継続的な体験学習により、子どもの関心を持続させ、森林のとらえ方の正を図っていくことが必要、④では、森林環境教育とは、森林を中心とした環境教育のことであり、環境教育のねらいである「環境問題の解決とよい環境の創造」を図っていくため、森林を「体験の場」、「知る場」、「かかわる場」としてとらえていくことが必要と強調されました。

今回の会議では、森林環境教育の重要性を再認識したところであり、今後、各署等における取組に活かされることが期待されます。

## 木を伐るって大変だ！

「建築士の卵」のための

森林環境教育

〈指導普及課〉

八月二十四日、高知県本山町の白髪山国有林（嶺北森林管理署管内）において、「建築士の卵」のための森林環境教育を実施しました。



間伐材体験の様子

この取組は、将来、木造住宅建築などの木材利用の推進役となり得る建築学科等に在籍している学生等を対象として、木造住宅設計、木材の特性、熱伝導率実験、地域材を利用した木造住宅見学などを行うことで、地域材の利用拡大に資することを目指す。四国森林管理局、高知大学（学生）、嶺北木材協同組合や（社）高知県建築設計監理協会、高知県、など、産・官・学が連携し、森から学ぶ木造建築等の設計士セミナー「森の未来に出会う旅」として平成十九年度から実施しているものです。

セミナーは、八月二十二日から二十八日までで、森林環境教育は、そのカリキュラムの一つとして間伐の体験を実施しました。

参加者は、全国の大学、地元の高知工業高校建築科から十六名が参加しました。

はじめに、現地で多田指導普及課長から、植え付けから伐採までの林業サイクルや新設住宅着工に占める木造の割合、木材自給率などを交え、美しい森林づくりを推進することや木材利用の必要性等の基礎的な知識について説明しました。

次に、スギの間伐体験に入りました。参加者は、建築学科等に在籍していても、森林に入ったり、ノコギリを使うことはほとんどないとのこと、汗を流しながら苦労して伐り倒し、「山の作業の大変さを実感した、でも楽しかった。」「木の肌はツルツルしてとてもきれい。」などの感想が聞かれました。

なお、この取組については、平成十九年度から二十二年度までの五カ年事業とし、全体で百名の受講者を確保することを目標としています。

## もり 森林からのおくりものを使って『親子ふれあい木工教室』を開催

〈指導普及課〉

八月二十五日、公募による親子一五組、三十五名が参加した「夏休み親子ふれあい木工教室」を、森林管理局の森林ふれあい館において実施しました。

この木工教室は、夏休みの研究・学習の支援と身近な自然環境への関心や理解を深めることを目的として、（財）オイスカ高知県支局と共催で、例年、夏休み期間中に小学生とその保護者を対象に開催しています。

最初に、森林の役割や森林



作品作りに熱中する親子

からの恩恵についてわかりやすく解説された紙芝居「森林からのおくりもの」を使って森林教室を行いました。途中、「みんなの家や学校を思い浮かべて、木で作られたものには、どのようなものがありますか。」などと問いかけると、子どもたち元気よく手を上げ、次々と答えていました。

続いて、森林整備などで発生した小枝やどんぐりをベニヤ板の上に障害物に見立て、貼り付け、木球を転がらせて遊ぶ「木球迷路」製作に取り掛かると、「木球が通り抜けられない。」「小枝が上手く切れない。」と悪戦苦闘していました。なかには子ども以上に熱中する保護者もあり、親子が協力して完成させた作品は、どれをとってもオリジナリティに富んだ大作ばかりでした。作品を手にした子どもたちは、みな誇らしげに目を輝かせ、「学校に持っていくの。」などと言いながら見せに来てくれました。

最後に、オイスカの海外研修生やボランティアが先生になり、積み木教室を行いました。ヒノキ間伐材で作られた様々な形の「積み木」三〇〇〇個を組み合わせて家やアーチをつくったりと、夢中で遊んでいまし



できた作品を手に記念撮影

た。自分の背丈よりも高い塔をつくる子どもには、みんなが固唾を飲んで見守りました。盛り上がったところで、オイスカ手作りの紙芝居を使って、間伐材の積み木がどこからやってきたのかを説明すると、みんな森林整備のために木を伐ることの大切さを実感したようでした。

「夏休み最後に親子で過ごす良い機会をもらいました。」と、感謝の言葉もいただきました。

なお、指導普及課では、今年の夏休み期間中に、このイベントを含め合計十六回、八〇七人を対象に森林・木工教室を行いました。

シンコー100

地

域の声

「明日はきつとエコロジー、いつか生態系循環の永遠の森につながるように」

株式会社エコアス馬路村

代表者 上治 堂司



エコアス馬路村設立の経緯  
高知県東部に位置する、人口約一千百人の馬路村。

古くは藩有林として、土佐藩の財政を支える等、「魚梁瀬杉」は秋田杉、吉野杉と並ぶ日本三大杉として名を馳せました。

また、往時には村内に二つの営林署が存在し、人口も三千人を超える程でした。

しかし、国有林野事業の組織再編や、抜本的改革により昭和五四年に馬路、平成一六年に魚梁瀬営林署の閉鎖がそれぞれ行われ、国有林と共に生きてきた村にとっては死活問題。

そこで、村を中心に森林をま

るごと販売していく施策として、多くの村民・団体の協力を得て、平成十二年四月に第三セクター株式会社エコアス馬路村は設立されました。

「エコアス」という社名の由来は、「明日はきつとエコロジー、いつか生態系循環の永遠の森につながるように」というポリシーからです。

現在は、山での現場作業を担う事業課、間伐材を様々な商品への加工を担う加工課、営業・情報発信・総務的な仕事を担う総務企画課で構成されています。

また、高知市内には馬路村のアンテナショップ「森の情報館エコアス馬路村」があり、建材をはじめユズ加工品に至るまで、馬路村の商品の販売と、情報発信を行っています。こちらでは、馬路村の水を使って家を建てるという施主と建築士との住宅相談会や、馬路村への住宅ツアー・勉強会を実施し、村産材の普及に努めています。

加工品の現状  
馬路村産の杉間伐材を利活



海外でも評価が高いモナッカ



2006年にグッドデザイン賞を受賞

用した商品群は、現在おさらやうちわを始め、文具、クラフト品、そしてバッグと様々な種類があります。特にバッグは「monacca (モナッカ)」の商標で販売しており、和菓子の最中と形状が似ていることから、この商標になりました。

現在、都市圏のインテリアショップや、ライフスタイルショップ、ミュージアムショップ等で販売されています。また、デザイン商品を扱うネットショップでも販売される等、木製品ではなく、デザイン商品というイメージで販路を拡げています。

モナッカは、海外でも評価が高く、二〇〇六年のグッドデザイン賞を受賞し、テレビ東京の「ガイアの夜明け」など、数多くのメディアにも取り上げられました。そして、イタリア・ミラノ、ドイツ・フランクフルト、フランス・パリ等で開催されている国際見本市へ出展し、国内外への販路開拓に挑戦しています。

そして、アメリカ・ニューヨークにあるニューヨーク近代美術館(通称・MOMA)のミュージアムショップでも販売されており、モナッカの商品価値も高まりつつあります。

また、エコアス馬路村では、間伐材製品の売上額の1%を馬路村の条例で管理する「千年の森基金」に積み立てて、森林に還元し森の保全に活用しようとしています。森から生まれたものを使っていたら、日常の中で森のを感じてもらえればうれしいです。